

平成28年度
地区教育会議のまとめ

平成29年3月
港区教育委員会

目次

I	実施概要	1
II	会議の要旨	
1	芝地区教育会議	4
2	麻布地区教育会議	9
3	赤坂地区教育会議	13
4	高輪地区教育会議	18
5	芝浦港南地区教育会議	24
III	地区教育会議を終えて	28

I 実施概要

教育委員会と各地区総合支所が連携して保護者や地域の声を直接聞く機会を設け、地域の特性や環境を生かした教育活動の推進と一層の充実を図るため、平成21年度から「地区教育会議」を実施しています。

参加者の発言の機会を増やすために、平成26年度から、参加者を2つのグループに分け、グループディスカッション形式で実施しています。

平成28年度テーマ

『学校・家庭・地域の連携による子どもの未来応援
～子どもたちへの教育支援について～』

【芝地区】 2月3日（金）18：00～20：00 区役所5階511・512会議室

出席者 公募区民7名 教育長、教育委員
校長・園長、総合支所長、次長
(計17名)

進行：庶務課長、学校整備担当課長

事業の説明

- ・港区学びの未来応援施策実態調査報告書について
- ・港区子どもの未来応援施策について



【麻布地区】 1月26日（木）18：00～20：00 麻布地区総合支所2階第3会議室

出席者 公募区民7名 教育長、教育委員
校長・園長、総合支所長、次長
(計17名)

進行：庶務課長、教育政策担当課長

事業の説明

- ・港区学びの未来応援施策実態調査報告書について
- ・港区子どもの未来応援施策について



【赤坂地区】 2月6日（月）18：00～20：00 赤坂区民センター4階第1会議室

出席者 公募区民7名 教育長、教育委員
校長・園長、副総合支所長、次長
(計17名)

進行：庶務課長、生涯学習推進課長

事業の説明

- ・港区学びの未来応援施策実態調査報告書について
- ・港区子どもの未来応援施策について



【高輪地区】 1月24日（火）18：00～20：00 高輪区民センター1階集会室

出席者 公募区民9名 教育長、教育委員
校長・園長、総合支所長、次長
(計19名)

進行：庶務課長、学校施設担当課長

事業の説明

- ・港区学びの未来応援施策実態調査報告書について
- ・港区子どもの未来応援施策について



【芝浦港南地区】 2月8日（水）18：00～20：00

みなとパーク芝浦1階 芝浦区民協働スペース

出席者 公募区民7名 教育長、教育委員
校長・園長、総合支所長、次長
(計17名)

庶務課長、学校施設担当課長

事業の説明

- ・港区学びの未来応援施策実態調査報告書について
- ・港区子どもの未来応援施策について



II 会議の要旨

1 芝地区教育会議

テーマ：学校・家庭・地域の連携による子どもの未来応援 ～子どもたちへの教育支援について～	
実施日時	平成29年2月3日（金） 午後6時から午後8時まで
実施場所	港区役所5階 511・512会議室
出席者	公募区民等（敬称略・五十音順）：宇都木智洋、小林和子、新光一郎、外山一宏、野畑淑恵、古橋義弘、向中野裕子 教育長：青木康平教育長、 教育委員：小島洋祐教育長職務代理者、薩田知子委員、澤孝一郎委員、田谷克裕委員 学校（園）長：小鹿原賢赤羽幼稚園・小学校長、和田京子御成門小学校長、石鍋浩御成門中学校長 区職員：益口清美教育委員会事務局次長、波多野隆芝地区総合支所長
事務局	佐藤雅志庶務課長、山田康友教育政策担当課長、新井樹夫学務課長、奥津英一郎学校施設担当課長、瀧澤真一学校整備担当課長、横尾恵理子生涯学習推進課長、渡辺裕之指導室長、金田耕治郎芝地区総合支所協働推進課長 庶務課庶務係（佐京良江係長、佐藤珠実、兵藤淳、細川安澄）、芝地区総合支所協働推進課（福永暢夫地区政策担当係長）
議事次第	1 開会 2 青木康平教育長挨拶 3 出席者紹介 4 事業の説明 (1) テーマについて 佐藤雅志 庶務課長 (2) 港区学びの未来応援施策実態調査報告書について 渡辺裕之 指導室長 (3) 港区子どもの未来応援施策について 佐藤雅志 庶務課長 5 テーマにもとづいたグループディスカッション 6 結びの挨拶 小島洋祐教育長職務代理者 7 閉会
配付資料	資料1 港区学びの未来応援施策実態調査報告書（概要版） 資料2 港区学びの未来応援施策実態調査報告書 資料3 港区子どもの未来応援施策（調査結果から見えた課題及び支援の方向性）について
グループディスカッションでの主な意見（要旨）	
Aグループ	
石鍋校長	貧困は経済的などところに注目しがちだが、心の貧困を抱えている家庭は非常に多い。港区は家賃も高い、また、働いてローンを返すため、両親ともに一生懸命夜遅くまで仕事をしている。お金はある程度あるため、デリバリーなどで子どもが一人で食事をとる、孤食の子が多い。経済的貧困もあり、制服にずっとゴミが付着していたり、上履きに穴があいたままになっている子もいる。安くさっぱりとした衣料品が販売されているため、見た目では貧困は判断出来ない。いつも伏し目がちである、元気な子が言葉を発しなくなった、などから注意深く発見していかなければならない。
小鹿原園長	幼児教育と貧困では、幼稚園には発達障害や特別支援の必要な子が入園してくるが、受け皿がない。その子の状態をみて、出来る限りの支援をしたいと思う。行政でも手立てがあればと思う。心の貧困では、より良い人間関係が図りづらくなっている。中学受験では、親の過度な期待に応えたいと無理して勉強する、それがストレスになり、学校でなんらかの形で爆発する、友達とトラブルをおこすなど、小4くらいから見られる。電子ゲームや携帯を持っている率も高い。子ども同士のかかわりが

<p>A</p> <p>B</p> <p>C</p>	<p>とても少ないので、より良い人間関係が築けないということもある。</p> <p>PTAの役員やPTAに出てくる親は、子どもとのかかわりも多く取ろう、通っている学校を少しでも理解しようとして学校に来る。そういう人達からは、貧困の事例はひろえない。</p> <p>昔は、人の家でご飯を食べることはよくあり、一人でご飯を食べさせることはしなかった。今は、外出先で友達に会っても、約束していないと一緒に遊べない。また、家の中でもみんなで一緒に遊ぶのではなく、それぞれ別のことをして遊んでいる。なかなか一緒に遊ぶというのが出来ないのかな、と思う。それと年の差がある子と遊ぶこともない。地域でも子供の顔が見えないというのが悩み。今は子どもが外で遊んでいない。</p> <p>私の父親世代はリストラにあう人が多く、奨学金の競争率が高かった。経済的な貧困に直面していると、その現実しか見えない。勉強しなさいと言われてもその大切さが見えない。大人になって初めてわかる。貧困の最中は、将来のキャリアモデル、将来へのルートが見えないのではないかと思う。どのような支援があり、それをどう利用するのかがわからない。心の貧困で、子どもとのかかわりが少ないというのはもっともなご意見である。ただ、緊急メールが毎日くると、子どもだけでこわくて外で遊ばせられない。自分も一緒について行って監視しながらでないと怖くて遊ばせられない。また、働いていると子どもを夕方しか時間がないため、遊ぶ場所もなかなか難しい。どうしても保育園に依存してあそばせる形になってしまう。</p>
<p>小島委員</p>	<p>ある程度の学校にはある程度のお金がないと通えない。今、小中ですでに貧困に直面していることが増えている。貧困により、子どもの学力が上手くつかないのが心配である。そこは小中の先生に大いに頑張ってもらいたい。また、行政としてどのくらい、何が援助できるのか。就学援助などもあるがなかなかおいつかない。大学生のボランティアに勉強をみてもらうとか、放課GO→などで放課後を過ごすとかもある。奨学金については、公立高校は実態としては無償化なので、高校くらいまでは経済的に心配なく通えるようにはなっている。</p>
<p>C</p> <p>A</p>	<p>子どもが貧困家庭の場合、自分からお金がないとは言いづらい。学校の中で、例えば、社会科で区の支援、行政の支援の仕組み、そのようなサポート情報を学びの中においてもらえるとありがたいと思う。全員の生徒に伝えるようなものを学校の内部で行ってもらいたい。未来のキャリアを築くという観点で行えばよいと思う。個別に対応されると子どもは傷つく。何か学校運営の中で出来ないのかなと思う。</p> <p>区の仕組みはなかなか伝わってこない。こちらから必要な情報を集めに行くことはあっても、なかなか外には広がらないので、難しいところでもある。</p>
<p>小島委員</p> <p>B</p>	<p>民生・児童委員は、大人の方にいろいろな支援をしているが、子どもにも何か支援しているのか。</p> <p>港区は、赤ちゃんから大人まで存在確認していくというのがある。区から乞われれば、子ども関係に同行することはある。</p>
<p>小島委員</p> <p>B</p>	<p>子どものみに関わることはあるか。</p> <p>親子に関わることになる。ケースにもよるが。最近では、ひとり親家庭の子どもの福祉手当受給の時に、審査を行っている。その場合、親がどこから情報を得て申請してきている。逆に、所得が低い人向けだと、本人に隠したい気持ちがあるので、情報を探しにはいかない。親同士知り合いならその子どもも知り合いになるが、知り合いでないとその子どもまではなかなか目が行き届かない。最近では町会に親が来ないので、親同士顔見知りになるのが難しい。</p>
<p>薩田委員</p>	<p>港区内に公園はあるが、勝手にどこかに行かれると親としては怖い。芝公園で遊んでいても、小中の子が楽しくブランコを使用している時に、幼児が来たら譲ることになる。譲ってあげてえらいな、と思うがなかなか小中学生の子が遊ぶことが出来ない現状もある。子どもが安心して遊べて、地域の方とも交流できる場所がないのはすごく残念である。子ども自身も遊びたいと思うが、時間もない。それが現実でもある。子どもがもっと外で遊べたら良いと思うし、遊んでいたら地域の大人も声</p>

小鹿原園長	<p>がかけやすい。</p> <p>今は、幼児期から習い事をしている。スポーツジムに通っている子もいて、小さい子向けのコースもあるし、体操教室もある。インストラクターと鬼ごっこしたりも出来るが、お金で子どもを遊ばせている。経済的に豊かでない子はゲームをすることになる。小さい時から心が満たされていないと、上手く人間関係が結べないことになる。</p>
益口次長	<p>幼児期からの教育が効果的であるということが近年わかってきている。スポーツ選手になるにも、幼児期から始めることが重要だと言われている。経済的に豊かでなくても、児童館や中高生プラザ、学童クラブに行って遊べる。また、学校にも放課GO→があり、学校の体育館で遊べる。行政でもこのように受け皿は用意しているが、自由に公園で遊ぶということがないのかもしれない。地域で見守ってくれる環境があれば本当は良いと思う。</p>
B	<p>そこに関わってくるのが時間である。遊ぶ時間がどのくらいあるのか。勉強、遊び、学校とあるが、遊びの時間がどんどん削られている。今、自宅学習はどのようになっているのか。</p>
A	<p>うちは、勉強を習慣づけるために自宅学習をさせている。</p>
益口次長	<p>学びの未来応援の報告書を見ると、小学校で72%、中学校で58%が自宅学習の習慣があるとの結果がある。家庭の中で、親が仕事で忙しくて家に居ないなど子どもに学習をさせられない親がいる、その代わりに塾にお願いしている、そのようなところに問題があるのかもしれない。</p>
石鍋校長	<p>心の貧困、親や周りとのかかわりの希薄さ、中高生になるとその淋しさをLINEで埋めている現状がある。LINEで仲間を作りわからないことを質問する。返事が来たら即返答しないと仲間外れになるため、夜遅くまでLINEのやり取りをすることになるため、勉強がおろそかになっている。全国でも今問題になっている。また、LINEは、小学校高学年でも使うようになってきている。報告書にざっと目を通したが、港区でも金銭的に悩んでいる人が多かった。学校と行政が協力して、区に相談して情報を提供してもらい、学校が子どもにうまく伝えることが大切だと思う。イニシアティブは行政にとってもらいたい。行政の方が様々なことを広く知っている。奨学金についても、情報提供してくれる時期が重要である。中学3年の2学期くらいだと進路指導と一緒に子どもに情報提供ができる。</p>
B	<p>修学旅行にお金の援助はできないのか。</p>
益口次長 学務課長	<p>就学援助を行っている。ただ、その情報を知らない家庭もあるかもしれない。全体の3割弱が就学援助を受けている。中学校では、チラシを配布して周知している。</p>
石鍋校長	<p>全員に配布しても、読まない人もいるし、うちには関係ないと思っている人もいる。個別に声掛けをするとそんな仕組みがあるのかと驚かれることもある。チラシも読んでも理解しづらいところもある。</p>
C	<p>情報発信のやり方は難しい。問いかけて考えさせることが人を引き込むことになると考える。子どもに教育することで、受けた教育について親に伝えると、大人にも気づきをもたらすことになる。問いかけをしながら、子どもの心の中に様々な大切な根っこを広げていくと良いのではないか。相手の心の扉を開くイメージで資料を作成すると良いと思う。どのように問いかけるのかは難しいのだが。</p>
小島委員	<p>芝の家がある。子どもなどを集めているいろいろやっているよね。</p>
B	<p>大人も子どもも集めているいろいろと行っている。居場所づくりである。</p>
小島委員	<p>どのような人がボランティアで来てくれるのか。</p>
B	<p>慶応大学の学生や高齢者の方々などである。</p>
小鹿原園長	<p>不登校はどこの学校にもいると思うが、その原因はさまざまである。貧困が背景にあって不登校になる場合もある。学校だけでは対応できないので、行政や子ども家庭支援センターとも連携をとってやっていかないといけない。不登校をしっかりと把握し、その子の家庭の状況をしっかりと掴んでおくことが大切である。場合によって</p>

<p>小島委員 小鹿原園長 益口次長</p>	<p>は、児童相談所との連携も視野にいれるケースもあるかもしれない。経済的なものとネグレクトとどちらが多いのか。 親の養育不足でも、背景には経済的なものがかかっていると思う。 学校から対象児童、生徒を知らせてもらったり、地域でもそのような子どもを見かけたら是非お知らせいただきたい。いろいろな対策を考えることが出来る。</p>
<p>Bグループ</p>	
<p>和田校長</p>	<p>家庭が子どもの居場所になっていない現状がある。家庭に保護者がいる時間が少ない。子どもだけの食事やベビーシッターが子どもを見ているなど親の子どもに対する接し方が十分でない家庭もある。保護者には子どもの気持ちをしっかり受け止めてほしいということを伝えている。 また、ご両親の不和を子どもは良く見ていて、大人への不信感や冷めた気持ちを持っている子どももいる。親の不安は子どもの不安になる。養育環境が子どもにとって十分に満たされるようにしていきたい。心の拠り所を作ることも学校では大切にしている。経済的に豊かで、何でもすぐに手に入る、何でもしてもらえる環境は、感謝の気持ちが薄れることもある。保護者同士のつながりも十分深まっているとは言えない。保護者同士のコミュニケーションを学校がつなげることも大事である。 御成門地域は広いこともあり、保護者のつながりが弱いと感じる。</p>
<p>青木教育長 A</p>	<p>心の満ち足りていない子が多くいると感じる。そういう子は、大人を試すような言動や行動をとる。声掛けが出来る子もいるが、出来ない子はわざとマイナスの行動をとり注意を引こうと知る。子どもに目を向けることが大事であり、どうしたら心が満たされるかが課題である。</p>
<p>田谷委員 澤委員</p>	<p>良く声をかけてくる子、良い子が実は淋しい子である。 貧困の中でどのように子どもの能力を伸ばしていくか。港区は精神的な環境の貧困が原因であることが多い。</p>
<p>B A</p>	<p>そのような子への対応をどうするのか。 頭ごなしに話をしない。まずは事実を全部聞いて、子ども自身でなぜなのかについて答えさせるように促している。子ども同士のトラブルは、まずは事実を聞くと、だんだん話が合致してくる。</p>
<p>田谷委員 A C</p>	<p>子どもが見せる顔は、学校、放課GO→では異なると思う。年齢などでどう変わるか。低学年の子は自分しか見えていない。5～6年になると固定観念を持つ子が多い。 芝小と御成門小の両方の地域に係るが、幼少中の親同士の関係が密である。芝小は商店街があり、子どもを見守っている。見守る大人がいるということが大切である。親のどちらかが小さいうちから子どもに目を向ける必要がある。貧困だから子どもが勉強が出来ないわけではない。</p>
<p>青木教育長 C</p>	<p>今は、経済的な理由で共働きしている。昔は周囲の人が見守ってくれたが、今はそうではない。世の中が変わってきたのだと思う。 港区は、人口を増やそうとマンションがたくさん建てられた。桜川小の廃校の経緯もあったが、芝小は児童が増えすぎている。どうするのか。教育委員会は、もっと大きなスパンで考えていかないといけない。</p>
<p>澤委員</p>	<p>昔は住民が主体で地域の人が子どもを見守っていた。学びは遊びを通して得ることが多い。貧しいから勉強が出来ないわけではない。放課後に子ども同士で安心して居られる場所、遊びやいろんな経験が出来る場所があり子ども同士のつながりもてる場が大事である。港区の現状はそういった場を持っていない。</p>
<p>和田校長 B</p>	<p>子どもの貧困については、居場所を作ることも大事だが、その前にやらなければいけないことがある。親の都合で子どもを預けているケースもある。心の貧困をどうするのか。大切なことは、親と子がつながり、心の安定を得ることが大切である。 モンスターペアレンツはやはりいるのか。なぜ保護者に言えないのか。</p>
<p>和田校長</p>	<p>保護者は、自分の養育態度を責められたら心を開いてくれなくなる。モンスターペ</p>

B	アレンツとは受け止めていない。学校の応援団として意見を伺っている。
和田校長	子どもが勉強をしない理由に親が勉強をしなくて良いと言っている、ということもある。親に気づきを与える場所、親のガス抜きが出来る場所があるのか。
澤委員	親同士話が出来る場所があると良い。 PTAの会などはあるが、来てほしい人は来ない。そういう方を引っ張り出すのが難しい。
B	もっと地域や町会などを活用して見守る仕組みが必要。町会に入る方法が分からない人もいる。マンションで隣の人の顔も知らないケースもある。
D	最近の若い子育て世代は、点と点のつながりはある。LINEでつながっていたり、子育てはアウトソーシングするものと思っていたりする。港区はいろいろな施策を行っているが、自分のため、子どものために、子育てのスタートの時点で親にしっかり考えさせる必要がある。
田谷委員	どこのタイミングでそうなってしまったのか。
青木教育長	民生委員として手助けできることはあるか。
C	民生委員の存在をわからない人もいる。今の親は忙しい。もう少しゆったりした子育てが出来ると良いと思う。
D	シルバー人材の人が公園で子どもに注意したら不審者扱いされたと聞いた。声掛けもできないのは淋しい。
波多野支所長	職員提案で、子どもの遊び場作りがあった。0～5歳が親と好きなだけ遊べる場所があると良い、と子育て経験のある職員からの提案が実現した。子どもが思い切り遊ぶことで豊かな心を育むことが出来る。POKKEの野外版である。1人が常駐して乳幼児の遊びに貢献するというもので、親が連れて行く仕組みである。今の行政にはないということで、職員提案になり、今回実現した。
和田校長	子どもが楽しいと思うことを親も一緒に楽しめるようにする。過干渉はダメだが、子どもにとってどうすればよいかを考えての過保護は良いと思う。
B	そういう提案を区民としてサポートすることは出来るのか。
青木教育長	区の施策は対処療法という面はある。これから子どもを育てる親たちに向けた長期のスパンで考える必要がある。
波多野支所長	人口が増えることは良いことだが、インフラ面では、数と質のバランスを考える必要がある。数だけ増えると質が担保されなくなる。
澤委員	芝や麻布十番など昔ながらの街がある程度残っている地域と、昔と全く異なってしまった芝浦のような地域とでは課題が違う。
田谷委員	保育園に父親が子どもを送っていく光景をよく見る。ほほえましく良いと思う。
A	過干渉はいけないというが、子どもが怒りっぽくなっているということが多くみられる。実際に過干渉の親は多いのか。
和田校長	子どもが望まないのに習い事をさせる、親がルールを敷いてしまう。子どもを思っていることだが、親が先回りしてしまう。一緒に考えることが大切。
澤委員	今の子どもは忙しい。子ども同士で遊ぶ時間がないのではないか。外で遊ばせておけないものか。
B	報告書で5割が将来に不安を持っていた。子どもに失敗させたくない親が多いからではないか。
D	子どもが他の子に後れをとってはいけない、と考える親が多い。
澤委員	子ども自身が好奇心を持ってやるのであれば良いが、親があればこれもやらせるのではない効果は生まれない。
B	どうすれば親にそのことを気付かせることが出来るのか。親に考えさせることが必要。
D	インターネットや雑誌での情報に踊らされることも多い。何かにおんぶしたものはいけないと思う。

2 麻布地区教育会議

テーマ：学校・家庭・地域の連携による子どもの未来応援 ～子どもたちへの教育支援について～	
実施日時	平成29年1月26日（木） 午後6時から午後8時まで
実施場所	麻布地区総合支所2階第3会議室
出席者	公募区民等（敬称略・五十音順）：愛敬真喜子、入江 誠、近藤敏康、増子照孔、増田珠子、唯是一寿、綿谷和宏 教育長：青木康平教育長、 教育委員：小島洋祐教育長職務代理者、薩田知子委員、澤孝一郎委員、田谷克裕委員 学校（園）長：大島美知代麻布幼稚園長、明田川輝美南山小学校長、平川恒美高陵中学校長 区職員：益口清美教育委員会事務局次長、堀二三雄麻布地区総合支所長
事務局	佐藤雅志庶務課長、山田康友教育政策担当課長、新井樹夫学務課長、奥津英一郎学校施設担当課長、瀧澤真一学校整備担当課長、横尾恵理子生涯学習推進課長、渡辺裕之指導室長、山本隆司麻布地区総合支所協働推進課長 庶務課庶務係（佐京良江係長、佐藤珠実、兵藤淳、細川安澄）、麻布地区総合支所協働推進課（寺島雅章地区政策担当係長）
議事次第	1 開会 2 青木康平教育長挨拶 3 出席者紹介 4 事業の説明 (1) テーマについて 佐藤雅志 庶務課長 (2) 港区学びの未来応援施策実態調査報告書について 渡辺裕之 指導室長 (3) 港区子どもの未来応援施策について 佐藤雅志 庶務課長 5 テーマにもとづいたグループディスカッション 6 結びの挨拶 小島洋祐教育長職務代理者 7 閉会
配付資料	資料1 港区学びの未来応援施策実態調査報告書（概要版） 資料2 港区学びの未来応援施策実態調査報告書 資料3 港区子どもの未来応援施策（調査結果から見えた課題及び支援の方向性）について
グループディスカッションでの主な意見（要旨）	
Aグループ	
明田川校長	麻布は外国人がとても多い。白金もたくさんいたが、南山小学校や幼稚園はとて多いと感じる。英語の出来る保護者がいて、通訳してくれることもあるが、言葉が通じないことによる孤独感や不安感などを抱えている保護者や児童がいる。
A	大使館が多いからそのようなことが起こる。
B	麻布では、道を外国人がよく歩いている、というのが普通である。東麻布になるとロシアの人が多い。
明田川校長 澤委員	英語圏でない方もいるので、コミュニケーションが難しい。 麻布が地区教育会議の2回目だが、いろんな方のご意見を聞くと目が開かれる。貧困、ネグレクトかと思ったら、遊びや自然が貧困という意見もあった。
A	物理的な貧困ね。お金がなくても心豊かにという人も多い。多面的に考えないといけない。
澤委員	必ずしも経済的に苦しいから貧困ということはないのではないか。
C	経済的に裕福なのでこの地域に住み続けるということもある。お金があるので起業する人も多い。働いているからいいだろう、と子どもがおきざりになっている。放課GO→もあるし、子どもを預かってくれる人もいる。現在の子どもの傾向として、大

青木教育長 澤委員	人に話しかけてくる子どもが増えた。高学年になれば自分から話しかけてこないのが普通だと思う。家で話していないのではないかと少し心配になる。 家庭でスキンシップがないということなのかもしれない。 実際に子どもと接していて、親とあまり会話をしていないのではないかと思うことがある。
C	今、築30年以上のマンションで家賃が下がっている。ちょっと頑張ればここに住めるかな、と住むことになる。家賃を払うために両親は働き、子どもが取り残されることにもなる。外国人も増えているが、日本に来るのであれば、言葉を覚えるなど、最低限のことはしてもらいたい。外国人に手厚くすればするほど、言葉が通じないから友達と遊べない、孤立するなどの状態になる。
A	少子化なので子ども同士切磋琢磨が出来ない。親も子どもに手をかけすぎている。先生も子どもにあまり厳しく言わない。それでは、社会に出たときにすぐにリタイアすることになってしまう。
田谷委員	大学を出ても無職の人もいる。
B	子どもを3人育てたが、世の中は子ども2人用の政策でとても大変だった。でも、家庭内では、いろいろな問題も子ども3人で解決してくれるので、とても良いと思った。麻布は、親が頑張っても働かないと住み続けられない。親の経済状況を見て子どもがいじめられることもある。そんな時、先生たちは子どもとスキンシップをとってくれたり、話をしてくれたりした。だが、それには先生が本来の業務に取り組むことが出来るような環境や先生に余裕がないと出来ない。先生方の余裕を作って差し上げられると良いと思う。
澤委員	アメリカに留学した時、地域のボランティアがいて、英語を教えてくれた例がある。日本語は、世界に通じる言語ではない。何のために日本の学校に入学したのかその趣旨を学校側も理解する必要がある。
B	自助で出来る対応もあるし、大使館のつながりを活用するというのもある。いろいろな国の人暮らしているのも、麻布に住んでいる人は外国人に対して違和感がない。
C	外国人もいろいろな人がいる。毅然とした対応をしなければいけない場面もあると思う。
B	税収の10%は外国人。そこを無下にできない。
A	教員の負担の負担が大きいと思うので、負担を軽減してほしい。
青木教育長	連合が行った調査で、教員負担の一番大きいのが保護者対応で、次が国や都などへの書類の提出となっている。区でも現在、教員の負担軽減の取り組みを行っている。
澤委員	いじめなど様々な問題がおこっている。それを学校でアンケートをとってもらい、教育委員会へ報告してもらおうともある。教員がやるのではなく学校に聞き取りに行くとかだと良いのではないか。
C	学校の事務員はどのような仕事なのか。副校長が様々なことに対応しているように思う。
青木教育長	事務を担当する人は、学校のことを十分に理解する必要がある。
C	学校の事務職員がいろいろとやってくれたら、教員の負担が軽減される。
明田川校長	学校のことをあまり知らない人が事務になっている現状があるので改善されるとよい。
澤委員	学校の教員にもっとゆとりを持ってほしい。教員は保護者対応に追われている。地域とPTAに協力してもらうことも大切。
B	子どもは、親、先生、放課GO→の職員に見せる顔がそれぞれ違う。
C	子どもはいろいろな場所によって見せる顔を変える。共働きの両親は、子どもといる時間が少ないので、教員にしっかりしてもらいたい。
B	中学校は、子どもだけでなく親の教育もしないといけない。中学受験に失敗した人も公立中学に入学してくる。気持ちを変えるのに3~4か月はかかる。保護者を学校だけで育てるのではなく、家族と地域、学校が連携してやっていかなければならない。区や学校からもっと働きかけてくれると良い。

田谷委員	都でも、家庭内教育を高める講演会を行っているが、そのようなところには本当に来てもらいたい人はこない。いじめ、貧困、愛情、遊び場などこれら全ては家庭の問題である。学校、地域、家庭が協力して子育てをすべきである。
青木教育長	保護者の中には、PTAから離れている人もいる。
C	不登校を学校のせいにしたたり、面倒くさい場合は無視したり。
澤委員	親が悪いから子どもも悪くなるというが、本来子どもは子ども同士の中で生きる力を育む場合もある。人は、本来自分で生きる力を持っている。個人的には、親よりも子ども同士の間で言われたこと、友達関係から学んだことが多かった。
C	地域で行っている野球などは、そういうことがある。
澤委員	子どもは、親が一生懸命働いている姿を見て、自分も頑張らなければ、と思う。
B	今は、小学校の時にきちんと勉強していないと、中学校の勉強にはついていけなくなる。中学1年から2年、3年とどんどん差がでて階級ができてしまう。クラブ活動などで勉強を教えてくれるようなところがないともう戻れなくなる。
C	港区は学力が高い。他区に行くと、学力が低いもの同士が仲間になって遊んでいる。港区では学力の階級があるから友達も出来なくなる。
B	クラブ活動で勉強を教えるとか、何か救ってあげられる方法はないか。
澤委員	近隣の大学を活用して、塾というか寺子屋みたいなものをやれば良いという意見もある。学力の貧困と地域の力をマッチングできないか。
A	学力が様々な子どもがいても良いのではないか。皆が100点でなくても。
B	でも、子どもは淋しさを、精神的な貧しさを感じる。
青木教育長	港区の特色かもしれない。
堀支所長	支所では、中高生プラザがある。地域に開放していて、放課GO→も行っているし、そこで勉強する時間も設けられている。放課GO→の職員が子どもの悩みを聞いたりもしている。子どもの居場所になっている。
C	うちの子どもも中高生プラザにお世話になっている。旅行に行って職員へお土産を買ってくるくらいいいところのようだ。職員も子どものことをよく知ってくれている。
A	社会性が身につくと思う。
B	最近は、子どもに挨拶しても挨拶をしてくれない子がいる。不審者かもしれないから挨拶しないということなのかも。
田谷委員	挨拶は難しい問題。タワーマンションなどでは、不審者対応で挨拶をしないで下さい、というところもある。
A	挨拶は社会常識。大切なことである。
Bグループ	
平川校長	本校は、豊かな家庭が多いが、港区ならではの愛情不足のお子さんがある。よく見るとその状態が分かる。兄弟との比較や他の家族との比較などが愛情不足の例としてあげられる。他は、外国人が多いので日本語のサポートが必要であるとか、学校教育以外で放課後の時間に何が出来るのかなどもある。
A	子ども食堂を行っている。苦しい生活を経験した子どもは周りに悟られないようにしている。貧困とは、貧しいだけではなく困っている人の事でもある。子ども食堂は、1食300円払えば食べられるが、有名私立に通っている子も来ている現状がある。報告書も読んだが、ここに書かれていない事実もある。子ども食堂は昨年1月にスタートしたが、学習支援も行っている。学習支援は、受けたい人がいるが人材がない。それと、子ども食堂を開くにあたって場所の確保が難しい。
大島園長	保護者の方と私たち教職員が幼児を共に育てるという考えで連携をとることが難しい。私たちは、園児に規則正しく生活する習慣を付けたいと考えているが、保護者が寝坊した、子供の支度が遅かったなどの理由で園児の登園が遅れる家庭もある。また、幼稚園を欠席させる理由が、「兄や姉の受験があり、園児が園でインフルエン

	<p>ザにかかって受験に差し支えないようにする」、などと考える方がいる。このような親の考え方、育児に対する価値観がそれぞれ多様化している。保護者を育てることも必要だと思う。</p>
B	<p>子どもは、こちらから「おはよう」と声掛けをしないとあいさつを返してくれない。子どもがおはようと言わないのは、親がおはようと言わないからだと思う。子どもは、親の姿を良く見ている。</p>
C	<p>麻布地区の地域事業で乳幼児向け事業はあるが、港区は平均年収1,000万円を超えており、麻布地区の貧困の実態はよくわからない。貧困とは何かという基準を行政から示す必要がある。港区の場合は、精神的な貧困が大きな原因ではないか。家庭力の向上や親の力の向上が重要。麻布地区政策分科会では、麻布地区で大学の学費が負担できない等については、実感がないという意見が多い。</p>
小島委員	<p>この問題は、平成26年度に国が法律を作って全国で実施することになったもので、港区で必ずしも当てはまるわけではないが、経済面に限らず心の貧困や親との関係の貧困が大きいのは事実である。しかし、麻布地区でも生活保護世帯やひとり親世帯は実際にあり、考えていく必要がある。</p>
C	<p>今後、麻布地区政策分科会でそういう対策を検討する予定である。</p>
平川校長	<p>就学援助の準要保護世帯は3割程度いる。</p>
学務課長	<p>港区ではどの地区でも3割程度いて、地域差はあまりない。</p>
小島委員	<p>高校進学のためには、学力をつけて行く必要がある。</p>
A	<p>豊島区に子ども食堂が6軒あるが、港区から学習支援を受けに3人来たと聞いた。豊島区までの電車賃をかけても無料の学習支援に来る子がいる。子どもが格差を感じずに通える学習支援があると良い。</p>
小島委員	<p>子どもの貧困問題は、学力のレベルが上がらない、それが進学に影響を与える、負のスパイラルである。公立の学校だけで十分な学力がつけば良いが、何か補助することは出来ないのか。地域の方々に組織的に応援出来ないのか。そういう仕組みを作れないのか。</p>
B	<p>CCCにはいろいろな方がいる。化学、ITなど様々な人材がいる。もったいない。豊富な知識も持っている。地域の力として活用出来るのではないか。</p>
小島委員	<p>組織的にやるということか。教育委員会の仕事として。</p>
益口次長	<p>学校支援地域本部がある。生涯学習事業等で学んだ人をどのように活躍していただけるかを検討している。</p>
B	<p>CCCで、区で活躍出来るような分野は何かというアンケートをとった。その活躍分野と活躍できる場所をマッチングしてくれる構図があると良い。</p>
A	<p>マッチングには、地域コーディネーターが必要。地域に根差した人材の活用、不登校で学校に行けない子どもを後押しできるかもしれない。</p>
小島委員	<p>麻布地区政策分科会とは何か。</p>
C	<p>麻布地区総合支所の区民参画組織「麻布を語る会」の1部会である。</p>
小島委員	<p>広く地域のいろんな人に入ってもらった必要がある。</p>
C	<p>分科会の中でも、地域コーディネーターの話は出ている。</p>

3 赤坂地区教育会議

テーマ：学校・家庭・地域の連携による子どもの未来応援 ～子どもたちへの教育支援について～	
実施日時	平成29年2月6日（月） 午後6時から午後8時まで
実施場所	赤坂区民センター4階第1会議室
出席者	公募区民等（敬称略・五十音順）：猪瀬秀幸、加生武秀、加生美佐保、立花清子、西田昌市、横田尚彦、渡邊里加 教育長：青木康平教育長、 教育委員：小島洋祐教育長職務代理人、薩田知子委員、澤孝一郎委員、田谷克裕委員 学校（園）長：青山伸子青南幼稚園長、関幸治青南小学校長、 福井正仁青山中学校長 区職員：益口清美教育委員会事務局次長、櫻庭靖之赤坂地区副総合支所長
事務局	佐藤雅志庶務課長、山田康友教育政策担当課長、新井樹夫学務課長、奥津英一郎学校施設担当課長、瀧澤真一学校整備担当課長、横尾恵理子生涯学習推進課長、渡辺裕之指導室長、佐々木貴浩赤坂地区総合支所協働推進課長 庶務課庶務係（佐京良江係長、佐藤珠実、兵藤淳、細川安澄）、赤坂地区総合支所協働推進課（鈴木信行地区政策担当係長、志村康久）
議事次第	1 開会 2 青木康平教育長挨拶 3 出席者紹介 4 事業の説明 （1）テーマについて 佐藤雅志 庶務課長 （2）港区学びの未来応援施策実態調査報告書について 渡辺裕之 指導室長 （3）港区子どもの未来応援施策について 佐藤雅志 庶務課長 5 テーマにもとづいたグループディスカッション 6 結びの挨拶 小島洋祐教育長職務代理人 7 閉会
配付資料	資料1 港区学びの未来応援施策実態調査報告書（概要版） 資料2 港区学びの未来応援施策実態調査報告書 資料3 港区子どもの未来応援施策（調査結果から見えた課題及び支援の方向性）について
グループディスカッションでの主な意見（要旨）	
Aグループ	
関校長	仕事で忙しい親の代わりに家事を子どもが行っていた。少しでもやらないことがあると親に叱られてしまう。頑張ってることをもっと認めてほしいと話していた。親は学校にも顔をだすのだが、働いているため家のことを子どもに手伝わせているのだと思う。子どもには、それだけいろいろ出来たらすごいね、と伝えた。今は、見守っている状況だが、これからは、子どもたちの生活環境もしっかりと把握していく必要があると感じた。
小島委員 関校長	親が仕事で忙しいから子どもに手伝わせているのか。 そうだと思う。親がどんな種類の仕事をしているのか掴みづらいし、親と担当がコンタクトを取るのも難しい。
A 関校長 青山園長	子どもにとってストレスになっていないのか。 ストレス感は出ていると思う。 幼稚園への入園児に面接を行っているが、子どもの発達が気になり、家庭でどのようにしたらよいかわからないため、学習塾のようなところに通わせ、改善しようとする親がいた。学習の前に食事や衣服の準備など子どもの生活のしやすさのための支援がなされていないことが課題と思われた。お弁当も食べやすさが考えられ

小島委員	ていなかったため、そこが大切だということを伝えた。小学校での学校生活につながっていくことなので家庭での教育も大切だと思う。
A	今の子どものお弁当はとても華やかで、あまり他の子と比べて違うお弁当だと嫌だなと思ったりするのでは。
小島委員	親の理不尽さの話があったが、低学年の子どもに縄跳びをさせているのを見かけた時、ちょっとでも失敗するとすごい形相で怒っていた。また、ゴルフに行った時に幼児にゴルフを徹底的に教えている親がいた。子どもは楽しそうにやっていたので、とても痛々しく、子どもの将来が心配になった。
B	今は、親が子どもに将来スポーツ選手になってもらいたいと小さいころから習わせたりするケースもある。
田谷委員	障害者差別解消法の講演で、ピアニストの辻井伸行さんの母の講演を聞いた。母親はピアノに詳しくなかったが、子どもがおもちゃのピアノに興味を持ち、弾きはじめていたので支援することにしたと話していた。伸行さんは、ピアノの先生は怖かったけどお母さんは一度も怒らなかったからピアノを続けられたと言っていた。親は無条件の愛を与える存在で、コーチとは別の立場にあると思う。
A	子どもの逃げ場が無くなってしまふのは避けるべきであり、家が子どもの逃げ場になるといいと思っている。学校は知識を身につける場所である。今小学校であいさつ運動をやっているが、あいさつは本来家庭で普通にやるものだと思うので、学校であいさつ運動になってしまうのはどうかと思う。
C	学校にあまりこない評議員が、あいさつしない子どもがいると言っている。子どもは知らない人にはあいさつしないもの。あいさつはコミュニケーション。コミュニケーションがあつてこそそのあいさつである。
小島委員	今のディスカッションを聞いていると、子どもより親の教育が必要な気がする。
B	先ほど無条件の愛という話があったが、港区の場合は金銭上よりもそっちの方が貧困だと言える。どうしたら親に無条件の愛を持ってもらえるのが課題である。
C	港区はおおむね、幼稚園から私立、中学校から私立、小中ともに公立の3パターンに分かれる。小学校が公立で中学受験をする子は、高学年になると塾で勉強を習っているのだから学校のテストは出来る。テストの点が良いのだから学校でちょっと悪い態度でいて何が悪いのか、成績が良いのだから友達がいなくても良い、という子も出てくる。そういうことが情緒面に表れる。それに対して学校はどうしたらよいのか。学校と保護者の考えのミスマッチをどのように考えるのか。
小島委員	すべてのタイプ別に高校、大学進学後、とどのように育っていくのかデータがあるとわかりやすい。
C	ずっと公立の子どもは、地域との関わりが大きく、地域に対する愛情が強いのではないか。
A	赤坂の未来を考えるには、地元の中学校に通わせるべきである。赤中では芋煮会を行っている。芋をふるまえるのは赤中の子どもだけなので、赤中に行かないとふるまう立場にはなれないよ、と話している。地域の人と一緒にやる行事であり、地域の人と一緒に中学時代を過ごして巣立っていく。そういった行事で地域に対して愛情を持ってくればよいと思う。公立中の魅力を高め、公立中に子どもが入学するようにするにはどうしたらよいのか。
田谷委員	地域で過ごし、地域のことしかしないと視野が狭くなる。多様性がなくなるという面もある。
益口次長	国連の職員は公立出身だと講演会で聞いた。私立だと同じような家庭が集まることになる。
B	公立も私立もどちらもいいところがある。公立の良いところは、家庭の経済力でも学力でも、様々な子どもがいるところだ。
	港区の学校選択制についてだが、もっと校風やカリキュラムを見たいと思う。例えば、東町小は国際学級があるが、HPでカリキュラムの確認は出来ない。学校の特色をもっと見られ、学校を選択出来るような情報開示をしてもらいたい。

小島委員 A	中学校は毎年説明会を行っている。各学校頑張っている。 青山小は希望者が増えているが、あまり児童数が多い方が良いという保護者もいるし、青南小は競争についていけないという話もある。
田谷委員 D	白金の丘が開校し、学校の人数が増えたが、地域がついていけない面もある。 家庭の差、教育力の差がある。今、働く女性が増えていて、仕事と家庭を両立しようと頑張っているが、女性にもものすごく軋轢があり子どもに無条件の愛を与えることが出来なくなっていると思う。また、家庭が貧しいから親子関係がギクシャクするわけではない。むしろお金があるから家庭教師を雇う、民間の学童保育に通わせるなどお金で解決していることもある。先ほど話にあった親の手伝いをしたくないという子は、家庭に何か足りないのではないか。
益口次長	子どもをベビーシッターにまかせきり、何か問題が起こった時に、学校がシッターとしか連絡がとれなという事象もある。母親もほんとに仕事が忙しく、子どもを育てますか、仕事を辞めますか、になる。
田谷委員 B	愛情の貧困ですよ。赤坂、青山はサラリーマンが多い。一度辞めると再就職が難しいのだと思う。報告書の自由記述を見ると、収入が高いことが幸せとは限らないことがわかる。収入が低くても幸せという人もいます。
A	それには地域の関わりも関係しているのではないかと。地域に居場所があり、地域の関わり合いがあればもっと良い。顔見知りになることが大切。
C	地域の子どものたまり場は、学童クラブだと思う。私の子どもも学童クラブへ行って遊ぶのが好きだった。もう少し大人になってもたまり場になるところがあればよいと思う。今、おやじの会を学期に一度開催しているが、メールやFacebookでやりとりしている。実際に会ってはいないが、多くの知り合いが出来た。
関校長 A	青南小にもおやじの会がある。今、どこの学校にもあるのではないかと。今、子どもにラグビーを教えている。年に2回試合があるが、その後に保護者で集まって懇親会を行っている。皆、とても楽しみにしている。
C	赤坂なんで～もでも、年に1度子どものお泊まり会がある。親も手伝いに行き、子どもが寝た後に懇親会を行う。皆、楽しみにしている。
B	親同志のつながりはとても大切。親同志が親睦の場を持つことは大事だと思う。
関校長	おやじの会は、もともとPTAは母親の参加が多いので、父親ももっとかかわろうというのが始まりである。このような取り組みはもっと広げる必要があるが、仲良しグループで終わってしまっはいけない。
益口次長	子どもの貧困対策がテーマだが、親同志の支え合いも大きく影響すると思う。おやじの会に出てこない人にどのように参加してもらうかも重要。
青山園長 C	親の愛情の価値観は様々で、何が良いとか悪いとかではない。 一杯のかけそばを思い出した。お金があるから、貧しいからではなく子が親をどう見るのが大切。
B	同じ課題を親子でどう乗り切れるか、が問題。
小島委員	これだけICTが整ってくると、バーチャル体験が出来る。ただ、例えば森、といった時に本当の森の中や森の空気とか実際にはわからない。バーチャルだけだと決定的に何か欠けていることになる。
C	情報はたくさんあり、全て紙やメールですませることが出来る。私なんかは、やはり対面で話さないといけないのではないかと思う。
B	人と人が、目を合わせることが重要。
A	子どもの個性を見つけてあげてほしい。子どもはそれぞれがいろんな個性を持っている。親がそこを冷静に見てあげてほしい。個性を見極めると我が子の育て方がわかる。
D	公立中学校の生徒数が少ない。それでは満足した中学校生活を送れない。子ども同士切磋琢磨することが必要なので、中学校を統合するなどしてほしい。各学校とも特色をださないといけない。

A	学校の統合が難しいのであれば、部活動だけでも合同で行うのはどうか。
C	
Bグループ	
福井校長	個別の事例ではなく共通した事例をお話しする。貧困は経済的なものだけではなく、精神的な貧困もある。経済的な支援は見えやすいし、港区は手厚い対応を行っている。精神的な貧困は見えづらいし対応も難しい。子育ての孤立化、思春期の気持ちの揺れ動き等受け止められない。地域のつながりも薄くなっている。子どもを温かく包んでほしい気持ちはするが、過干渉は良くない。
A	実態調査については報告書の資料をもらったので分かるが、資料に記載のある基礎調査についてはいつ誰に対して行ったものかが分からない。インターネットで調べ、それなりの支援や援助を受けている家庭を対象にアンケート調査とヒアリング調査をしたものと分かった。今回は、経済的なことだけではなく、いくらお金があっても様々な問題を抱える家庭・子どもがいて、そこを含めて考えたいということだが、基礎調査の結果と実態調査の結果を合わせて見ることでわかる課題があると思う。基礎調査の結果も資料として配布してほしい。
澤委員	教育委員会のねらいは、経済的貧困だけではなく様々な面で貧困を考え、ご意見をいただきたいというのが主旨になる。
教育長	過干渉が良くないというキーワードは、他の地区でも出ていた。親が勝手にルールを引き、子どもをそのとおりに進ませるのではなく、いろいろな人がそれを支援することが大事である。
福井校長	子どもの発達段階に合わせて行わないと、子どもの自立につながらない。子どもの価値観は、特に中学校や高校では広がっていくため、親が子どもの価値観を受けとめていかないといけない。
澤委員	子どもの居場所がなく、親との関わりが少ないなど、精神的に恵まれていない子どもが確かに多くなっている。一方で、研究発表会で、子どもが発表するのを見たり、ディベートを行ったりしたが、たくましさを感じたりすごいな、と思ったりした。
B	地区委員会等でいろいろな行事を行うが、参加する顔ぶれはいつも同じ。そういう場に来てくれない子どもへの対応をどのように行えばよいか。精神的な貧困にどう関ればよいのかが分からない。
福井校長	地域活動にいろいろご対応いただき感謝している。子どもの年齢によってもかかわり方は異なる。いろんな大人や地域の人とのつながりを作れば、子どもも安心していろいろなチャレンジできる。子どもは温かい環境を求めているので、温かさの輪をつなげる仕組みが必要である。
青木教育長	地区委員会は、そういう役割を果たしていると思う。子どもの認められたいという欲求を家庭で満たせない子は、他の場所でそれを求めている。
A	今でいう発達障害の子どもがいたが、いい先生との出会いで良い方向へ変わった例があった。子どもはそれぞれに目立ちたい、認められたいという思いがある。良い出会いは大切であり、地域の活動にも参加を促す工夫をしていけたら良い。
C	今の母親は、子どもを怒れない。昔は電車の中で子どもを座らせなかったが、今は逆である。
澤委員	学校でも、子どもを強く叱れない。叱られたことのない子供が多い。昔は地域の大人が子ども達を叱っていた。子ども達は、重層な人間関係で育つというが、今は学校と家庭だけになっていて、そういう環境がなくなっている。
A	最近は、近所に誰が住んでいるかわからないというが、港区は町会が発達している。せつかく町会があるなら、何か連携できないかと思う。
澤委員	かつては大人同士つながりがあったが、今は少ない。町会でも、若い人の参加を促しているが、一般の人が活動に集まらない。

青木教育長	子ども達の居場所を作らなくては行けないが、芝地区では子どもだけで遊んでいる場所、子ども同士が自分で遊べる場所があり、精神的な安定を保っている。お台場は、その役割を学校が担っている。
福井校長	居場所というのは、自由に使える時間と場所である。子ども同士だけではなく、親同士の居場所も必要。親の疲弊は子どもにも影響する。
澤委員	親の居場所づくりは難しい。また、父親は地域に居場所がないことが多い。
福井校長	つながりを作るツールとして地域行事がある。地域コミュニティは、母親同士の方が強い現状がある。そういう中で、おやじの会は非常によいと思う。
B	若い人の中では、つながりが出来ているが、それより上の世代ではなかなか難しい。
A	地域人材の活用で「ミナヨク」というものがあるが、年齢が40歳代までと制限がある。もう少し高齢の方が参加して、活動できる場があるとよい。父親世代は忙しくて、子どもとどのように接したらよいか、どこまで言っているのかという加減が分からなくなっている状況もある。
薩田委員	おやじの会があることは聞いていた。父親のスケジュール上難しい面もあるが、もっと全体的に広がると良いと思う。
A	時間があったら参加したいという人はたくさんいると思う。朝のおそうじなどを行うと意外と人が集まったりする。
澤委員	柱となるリーダー的な人がいることが重要である。
A	タウンフォーラムの中でも、やっても良いという人がいる。きっかけが必要である。
薩田委員	高輪地区のCCCで活動している人の中で、CCCを卒業後活動の場がないという話を聞いた。
澤委員	潜在的な人材はたくさんいるはずである。リタイアされた方、様々な経験がある方をどのように活用していくかが課題である。大きな枠組みで考える必要がある。
福井校長	豊富な人材を地域とマッチングさせるコーディネイト機能が必要である。学校に求められることが多すぎるので、学校支援地域本部のような子育て支援地域本部みたいなものを作るのはどうか。学校だけではやりきれないのでそこをサポートするような仕組みが大事だと思う。
澤委員	何でもかんでも学校に役割が求めるのは先生方が大変になる。地域やPTAから学校を支援する仕組み作りが大切。
福井校長	子育て支援地域本部とした方が、学校だけと捕えられず、地域で考えていくものという感じがする。
薩田委員	支援というと受け身なイメージもある。
澤委員	民生委員の方に活動してもらおうとかはどうか。
C	警察の方の話を聞く機会があったが、人を警戒しないといけないと教えられる。今は、知らない人にあいさつしないような教え方をするので、難しい。子ども達にあいさつされるととても嬉しい。
A	知らない人から誘われてもついていってはいけないと教わる。あいさつは良いのだが、どういった声掛けに注意しなければいけないのか、具体的なセリフを示して教えることが必要なのかもしれない。
澤委員	今はSNSが発達していて、子どもがどういう人と付き合っているか親が知らないし、管理しきれないのが現状ではないか。

4 高輪地区教育会議

テーマ：学校・家庭・地域の連携による子どもの未来応援 ～子どもたちへの教育支援について～	
実施日時	平成29年1月24日（火） 午後6時から午後8時まで
実施場所	高輪区民センター1階 集会室
出席者	公募区民等（敬称略・五十音順）：今泉昌代、唐木富士子、芝耕太郎、瀬能啓子、西崎伸彦、平岩力、福島隆、細谷尚子、望月義也 教育長：青木康平教育長、 教育委員：小島洋祐教育長職務代理者、薩田知子委員、澤孝一郎委員、田谷克裕委員 学校（園）長：新井智子白金台幼稚園長、加納一好白金小学校長、伊藤俊典白金の丘中学校長 区職員：益口清美教育委員会事務局次長、横山大地郎高輪地区総合支所長
事務局	佐藤雅志庶務課長、山田康友教育政策担当課長、新井樹夫学務課長、奥津英一郎学校施設担当課長、瀧澤真一学校整備担当課長、横尾恵理子生涯学習推進課長、山越恒慶図書・文化財課長、渡辺裕之指導室長、大澤鉄也高輪地区総合支所協働推進課長 庶務課庶務係（佐京良江係長、佐藤珠実、兵藤淳、細川安澄）、高輪地区総合支所協働推進課（遠藤圭一地区政策担当係長）
議事次第	1 開会 2 青木康平教育長挨拶 3 出席者紹介 4 事業の説明 （1）テーマについて 佐藤雅志 庶務課長 （2）港区学びの未来応援施策実態調査報告書について 渡辺裕之 指導室長 （3）港区子どもの未来応援施策について 佐藤雅志 庶務課長 5 テーマにもとづいたグループディスカッション 6 結びの挨拶 小島洋祐教育長職務代理者 7 閉会
配付資料	資料1 港区学びの未来応援施策実態調査報告書（概要版） 資料2 港区学びの未来応援施策実態調査報告書 資料3 港区子どもの未来応援施策（調査結果から見えた課題及び支援の方向性）について
グループディスカッションでの主な意見（要旨）	
Aグループ	
伊藤校長	港区だから貧困がないわけではない。外国籍の方で日本語の習得が難しく、高校入学の際に学力で苦労したケースもあった。
澤委員	外国籍の方の経済状況はどうか。
伊藤校長	家庭教師を雇える方もいれば、仕送りをするために日本で働いている方もいる。見ただけではわからないので、こちらでいろいろな子を探し出してフォローするなどしている。
A	青少年委員をしていて、主に地区のキャンプ、いちご狩りなどで子どもたちと接しているが、その子たちのバックグラウンドまではわからない。そこまで深いことは話してはくれない。
B	いちご狩りなどは、参加費がかかるので貧困家庭では行かせられない。本当は参加したいが、費用面で我慢している子がいるかもしれない。
A	地域としては、そういう子に参加してもらいたいが、イベントにも費用がかかるため参加費の関係もあり、なかなか難しい。
澤委員	経済的な理由でキャンプなどに参加できない子がいることを把握できるか。

A 澤委員	そこまでは難しい。 精神的な貧困というのもある。そういった事例はあるか。
B 青木教育長	親が、子どもが家にいない方が楽だから、キャンプに預けるとかはあるかもしれない。子どもの中には、本当はキャンプに行きたくなかったのに親に言われたから参加した、という子もいた。 子どもが何を望んでいるかは、お配りした調査結果からもわかるので、子どもの視点から見た方が貧困の実態はわかるかもしれない。親が子どもへのしつけ等を放棄しているケースもある。父母が家にいるのにずっと児童館で過ごしていて、家に帰りたくないという子どもがいることも別の調査結果でわかっている。
C 澤委員	港区はすごく恵まれていると思う。都の中学校でPTA関係の会合に出て、いろいろな区の実態を聞くと、港区の子ども達は、大人しく良い子が多いと感じる。貧困と言っても、心のつながり、友達とのつながり、親とのつながりをどのように図るのか。また、港区は、都の平均より体力的な数値が下回っているため、体の貧困も気になる。遊ぶ環境、自然環境も貧困と言えるかもしれない。安全性に配慮しているのか、公園なども整備されていて、ダイナミックな遊びをできるものがない。ブランコも安全性からなのか、なかったりする。
C 澤委員	ブランコは、指をはさむことがあるのに、なぜ行政が公の場所に設置するのか、と問題になったことがある。 本来、公園で子どものための遊具があるべきところに高齢者の健康づくりの器具がある。また、子どもだけで遊ぶということが今はなくなって、親がついて見ている。安全安心メールで、すぐに情報が入ることもあると思う。 配布された調査結果を見ていると、親と一緒に遊んでいますか？という設問があった。1時間の間にどのくらい親と遊ぶのか統計調査を行うとかはどうか。
C 薩田委員	港区は、高層マンションも多く、歩かずの下まで降りられ、階段の上り下りをあまり経験していない。駅もエスカレーターがある。学校で体力の向上に力を入れているが、学校で体育ばかりを行えば、学力の点から保護者からお叱りを受けることになるので、なかなか難しいところもある。 子どもが、ワクワクしていないと感じる。 浜離宮近くの公園に回転塔があった。なくなってしまった時は、とても残念に思った。平衡感覚が身につくし、あのような大胆な遊具を今の子ども達はなかなか経験できない。安全は大事だが、安全が最優先になるのは少し残念だと思う。また、今の子ども達は、塾や習い事に忙しく、遊ぶ時間が限られている。その限られた時間の中で、一緒に遊ぶ工夫をしていることも見受けられる。
C 青木教育長	今は、外遊びではなく家の中での遊びになっている。中高生プラザは人気があるが、中高生が場所を使ってしまい、小さい子ども達が遊べないというケースもある。今は何もないところでは遊べない、外での遊びに面白みがないため、内遊びになるのかもしれない。
C 横山支所長	高輪地区では、プレーパークを行っている。斜面で泥だらけになりながら遊ぶ事業で、とても人気があり、区外からの利用者も多い。子どもが自由に遊ぶ、上の子が下の子の面倒を見るなどが見受けられる。プレーパークのようなものは、本当に必要だと思う。また、近隣の品川区の子どもが児童館にドッチボールなどをするために来たりするが、すごく元気に遊んでいる。それを見ていた港区の子どもも一緒に混ざってドッチボールをしていたりもする。
C 青木教育長	みんなで遊ぶ機会がなかなかない。家に居づらいから児童館などに行く、そこで自分だけの世界に籠ってしまう。何かみんなで行うことがあれば、その時間は子どもにとってとても大切な時間になる。家が嫌でも、別のところで楽しく過ごせること、これも大切だと思う。
C	今は、ゲームでも通信できるため、ゲームの中で友達とつながって遊ぶ。しかもとてもそれがとても楽しく、バーチャルで何でも体験できる。ただ、それは現実ではない。

澤委員	昔は、学校が終わると、親が家に居ても外に行き、友達と缶けりや鬼ごっこ、野球など何でもやっていた。その中で、上の子も下の子も一緒に遊んでいた。今の子どもは、小学生でも公文やバレエ、ピアノなど本当に放課後は忙しい。
C	友達と触れ合う時間がない、という面では時間の貧困とも言える。
D	子むすびの協力会員だが、子むすびを利用するのは、ある程度ゆとりのある方である。例えば、保育園から子どもを預かって塾へ送る、児童館で待ち合わせして、塾へ送るなどである。帰りは親が塾へ迎えに行くため、親と一緒にいられないことで淋しい思いをしているかどうかはわからない。また、子ども食堂のお手伝いもしているが、そこでの子ども達の会話の中に、ヨーロッパに行った、とかアメリカに行ったとかを話しているのを聞いたことがある。港区での子ども食堂で、どんなサービスができていいのか疑問もある。一緒にご飯を食べるだけでは、その家庭の奥深くまでは見えてこない。
青木教育長 伊藤校長	人で食べるのが淋しいから皆で食べられるために来ることもあると聞く。 学校に朝ごはんを食べてこない子どももいる。朝、親は寝ていて、子どもがいつ学校へ行ったのか知らないというケースもある。その分、給食でお代わりしていたりする。
A	キャンプに来る子の中に、学校に馴染めない子どもがいた。小3から参加し、最初は隅っこの方にいたが、自分にも関心をもってもらいたくてだんだん近くにくるようになった。大学生がリーダーをやっているが、大きい兄や姉のように仲良くなり、そのうちに他の子どもともコミュニケーションがとれるようになってきたら、学校も楽しくなってきた、という事例はいくつか見た。 学校に馴染めない子どもは、親子関係が影響していることがある。親の期待が大きくてつらい、だから学校で問題を起こしてみるなど。
C	朝食や親子関係は、本来家庭の問題である。ただ、本当はそういう親も孤立している。行政として何かやるのであれば、子どもの親を孤立させないための工夫が必要だと思う。そのような場を提供してもらえたら解決していくのかな、と思う。
A	問題のある子どもの親に限って、PTAの集まりに出てこない。PTAの委員などにもならない。忙しいのかもしれないが、なかなか難しい。
C	子育て相談とかはどうか。
澤委員	区でもいろいろと相談窓口は設けていて、広報にものせているが、そういう方は窓口に来ないし、広報も見ない。
薩田委員	困っている方は、そこまでの余裕がない。精神的、金銭的に余裕があるから子むすびに頼もうとか考える。そのうち、中学生になると子どもは自分から話さなくなってくる。子どもから何らかの意見がもらえるといいと思う。いじめのアンケートに質問項目を少し加えるとかもいいかもしれない。
B	朝食に何を食べたか、などの食べたもののアンケートはどうか。成長過程において、炭水化物ばかり食べるのはよくない。きちんとタンパク質をとることも大切であるし。その辺をフォロー出来ないのか。
D	子どもへのアンケートは良い。親は、世間体があるから本当のことは言わない。
A	炊飯器のない家庭もある。電子レンジでチンしてご飯を食べるとか。
青木教育長	子どもの育て方がわからない。わからないからほったらかしにしてしまう、ということもある。
薩田委員	保健所の事業に「うさちゃんくらぶ」がある。希望者が多く、今は各地区で募集しているが、生後2～3か月で同じ月齢の親子が集まるので、子育ての最初の第1歩としては良いと思う。今でも集まっているいろいろな話をする。
C	1歳児半・3歳児・就学前と健診があるが、今は発達しかみていないかもしれないが、子育てや生活の行き詰まりを感じているかどうかも見るとよいと思う。すでに行政でやっていることを上手く活用できるようにするのはどうか。
横山支所長	支所も、子育て広場を行っている。そこに集まる人の経済状況等はわからない。多くは母子で参加しているが、横のつながりが出来るのは大きいと思う。こういうと

<p>C 青木教育長</p>	<p>ころに来てもらうのもよいと思う。 いろいろな機会があるのであれば、その機会を利用してはどうか。 経済的な貧困は見えやすい。それ以外の貧困はわかりづらいので対策を講じにくいこともある。子どもが意見を出しやすい環境を作るのが必要かと思う。メールなども活用し、子どもが発信しやすいいろいろなツールを提供してあげることが必要だと思う。</p>
<p>B 澤委員</p>	<p>テレビで見たが、塾はお金がかかるため、他区で週に一度地域の大学生が子どもに勉強を教える取り組みを紹介していた。大人より年も近いし、たまには遊びも教えてくれる。そこに行くことが楽しいと思う、そういう場を作って欲しい。 親が子どもを育てるのではなく、子どもは子ども同士でいろんなことを学んでいる。放課後の居場所、家に帰るより面白い場所があるといい。子どもが外でいろんなことを学んで成長できることは大切だと思う。</p>
<p>C 伊藤校長 A</p>	<p>友達や少し上の先輩の言葉は大切。中学校のPTA会長時代、卒業生が在校生向けに進路説明会を行ったら、在校生がとても喜んでいて。港区は財力があるのだから、尊敬できる憧れの先輩を学校に呼んで交流する場を作っていくべきではないか。子ども同士で子どもを育てることも大切。 白金の丘中学校でも、同じようなことを行った。子ども達には、とても評判が良い。キャンプの時、教師を目指す大学生が、その研修のために参加してくれている。ほとんどが明治学院大学と國學院大学の学生で、そういう学生を地域や学校に送り出すことが出来る。はじめての子どもでもすぐに仲良くなれる学生ばかりだし、大学生にとって、とても勉強になる。声をかければきっときてくれると思う。場所としては、いろんなスペースもあるので、中高生プラザが良いと思う。</p>
<p>Bグループ 加納校長</p>	<p>白金小では、経済的に恵まれている家庭が多く貧困の事例は認められない。区費講師も多いし、幼少中連携も良く、また上限はあるが、副教材費も区から出ているなど港区は教育への支援が手厚い。課題は、心の問題である。たくましさや身につけ、コミュニケーションが取れるようにする、心と体の強さが大切。</p>
<p>新井園長</p>	<p>経済的な理由の貧困は、表立っては見られない。経済的な事以外には課題はある。幼児期からの子育ての大切さがあり、幼稚園が保護者の子育ての支援をする必要性も感じている。子育てに疲れたという話も多い。</p>
<p>A B</p>	<p>区でボランティアを行っている。高輪は、低所得と高所得が混在している。 各家庭の子どもの数でも変わってくる。教育に対するお金のかけ方が違う。所得の高低で単純に2分化されるのではなく、子どもと親の置かれている状況で変わってくる。</p>
<p>田谷委員</p>	<p>貧困は顕著には表れない。タワーマンションもたくさん建設されているので、新しく入ってくる住民のほとんどが富裕層と思う。子どもの話の中に親の話の受け売りで格差を表すような会話もある。</p>
<p>小島委員 A C</p>	<p>本日のテーマからいえば、経済的な貧困の方に、どのように教育の支援をしていくかである。具体的に何かあるか。 キャンプやスキーで子どもと触れ合うが、ひとり親家庭に愛情欠乏症を感じる。「私の話を聞いて！」という子が必ずいる。なるべく聞いてあげるようにしているが、それが所得に関係するものか、ネグレクトなのかはわからない。白金の丘PTAでも言われているが、外であいさつすると不審者だと疑われたりもする。区費講師で組織的に先生の働きをサポート出来ないか。子どもと先生の関わりをもっと濃くする必要がある。先生は、子どもを見る時間が必要なのに授業、テストの採点、PTAとのかかわりなどやるのがたくさんある。皆で手分けして行えばよいと思う。 港区の支援は充分だと思う。職業柄、お母さんたちの相談を受けるが、偏差値が高くなくても医学部に入学した事例もある。将来を決めるのは、私立に行っているか</p>

小島委員	らではない。貧困と勉強のかかわりはあまりないのではないか。PCで調べ物も出来るし、図書館に行けば本もたくさんある。
C	心構えが一番大切だが、何らかの支援をしないといけない。子どもがすべてを自分でカバーすることは出来ない。
小島委員	親が本を読まない。子どもにだけ本を読めと言っても。
C	子どもはその親から生まれたかもしれないが、子どもの明るい未来のためには何らかの手立てを考えないといけない。
B	毎月、子どもへの読み聞かせに参加している。勉強会があればいいと思う。
加納校長	うちの子は家では勉強しない。学校だと勉強する気になるらしい。学校でしか勉強せず、放課後残って宿題をやっていたりする。
B	放課後などに指導する時間が無くなってきている。本当はそういう子どもたちを教員は放課後に指導したい。でも、会議とかいろいろあるため、なかなかかわれない。教員がやらなくても良い仕事を無くしていき、放課後子どもと向き合う時間を作らせたい。テストの採点は担任が行ったほうがよい。どこを間違えたのか、その子の事が分かり、指導に生かすことができる。
加納校長	副校長先生が学校の先生を見ることになるので、一番大変だと思う。
田谷委員	教員が休職した場合は、全校でサポートしていく必要がある。 白金の丘はバス通りがあるので、行き来する際に見るが、職員室は夜遅くまで電気がついている。先生に負担がかかっていると思うがその負担を軽減できないか。子どもと接する部分以外では地域の力を活かしてはどうか。地域力の活性化は必要である。
小島委員	報告書を見ると、子ども達がいろいろな悩みを持っていることがわかる。中学生は特に勉強のことが不安とあるので、そういった支援が必要。学校の先生に勉強を見てもらうのが一番ではあるが。
D	CCCに参加している。ボランティア活動に「子どもカレッジ」がある。子どものために何か出来ないかと思う。月に1度に科学実験とかやっていた。私は編み物なら教えられる。子どもたちは、自分のやりたいことしかやっていないような雰囲気があった。他に、子どもに対する活動だと子むすびもある。
A	費用がかかることがネックなのか。地区委員会等で周知して地域にお知らせすることは出来る。町会の掲示板も効果は大きいと思う。
D	CCCに参加していなければ、私もわからなかった。
A	たまたま地区委員会にいたので知ったということもある。田谷委員と同じ町会だが、情報が多すぎて、子どもも学校からの情報を親に渡さないとも聞く。別の方法も考えないといけない。
D	CCCでは情報がたくさんあるが、実際に見学したり話をしたりする。実際に経験してみないとわからない。
A	子どもは知らないことには興味を持てない。白金の丘が出来たときに、児童館が無くなった。スマホやゲーム以外で出来る遊びはないか。子どもたちに興味を持ってもらうきっかけ作りとして何か経験させることを考えている。
田谷委員	特別なことをするのではなく、昔遊びをすることか、囲碁を一緒にやるとか。
E	新住民との格差などはあるが、港区の貧困に共通しているのは人間関係の貧困、心の問題が挙げられる。何世代か一緒の家庭も非常に少ない。大人を信じることが出来る環境が大事であり、人と人とのつながりを作り出すチャンスを見つけることが大切である。港区は環境、場所、人材に恵まれている。対処療法ではなくもっと大きな観点から環境を整備する必要がある。一番大事なのは先生と子どもが向きあう時間を作ること。学校と家庭が機能してから地域になる。
小島委員	人と人、特に親と子が向き合うことが大切。経済的には恵まれているのにこのようなことが起こる。子どもへの愛情が必要。
E	人との関係の中でこそ教育であり、人を育てる考え方の啓蒙も大切である。そういう拠点である活動の場所を作っていくことも大事だと思う。

新井園長	幼稚園でも、教育内容より子どもをとりまく環境に対する要望が多い。また、保護者間の問題など親自身の悩みからくるSOSの対応も多い。他のことで時間をとられるので、本来の幼稚園や学校の在り方を保護者に理解していただく必要がある。
------	---

5 芝浦港南地区教育会議

テーマ：学校・家庭・地域の連携による子どもの未来応援 ～子どもたちへの教育支援について～	
実施日時	平成29年2月8日（水） 午後6時から午後8時まで
実施場所	みなとパーク芝浦1階 芝浦区民協働スペース
出席者	公募区民等（敬称略・五十音順）：伊丹桂、岩田恵子、小倉真吾、裕田栄、佐藤久代、廣野清美、間瀬法美 教育長：青木康平教育長、 教育委員：小島洋祐教育長職務代理者、薩田知子委員、澤孝一郎委員、田谷克裕委員 学校（園）長：山形美津子芝浦幼稚園長、船木亮作港南小学校長、渡辺一信港南中学校長 区職員：益口清美教育委員会事務局次長、浦田幹男芝浦港南地区総合支所長
事務局	佐藤雅志庶務課長、山田康友教育政策担当課長、新井樹夫学務課長、奥津英一郎学校施設担当課長、瀧澤真一学校整備担当課長、横尾恵理子生涯学習推進課長、渡辺裕之指導室長、山本睦美芝浦港南地区総合支所協働推進課長 庶務課庶務係（佐京良江係長、佐藤珠実、兵藤淳、細川安澄）、芝浦港南地区総合支所協働推進課（市川健太郎地区政策担当係長、瀬戸元太）
議事次第	1 開会 2 小島洋祐教育長職務代理者 3 出席者紹介 4 事業の説明 (1) テーマについて 佐藤雅志 庶務課長 (2) 港区学びの未来応援施策実態調査報告書について 渡辺裕之 指導室長 (3) 港区子どもの未来応援施策について 佐藤雅志 庶務課長 5 テーマにもとづいたグループディスカッション 6 結びの挨拶 青木康平教育長挨拶 7 閉会
配付資料	資料1 港区学びの未来応援施策実態調査報告書（概要版） 資料2 港区学びの未来応援施策実態調査報告書 資料3 港区子どもの未来応援施策（調査結果から見えた課題及び支援の方向性）について
グループディスカッションでの主な意見（要旨）	
Aグループ	
渡辺校長	経済的な貧困だけでなく愛情や遊び場の貧困がある。生徒の人数が少ないと、自己肯定感が持てないこともある。海洋大と協力して港南の運河の水質検査を行い、どんな生物がいるのか調べたり、港南の運河の水をきれいにしたら風景も変わる、子どもの気持ちも上向きになるのではないかと思った。学校で港南のヘドロから電球をつけ、その電球で運河を飾る、地域の防災に関わり、子ども達も参加させ、宿泊防災訓練も行った。学校が豊かになれば地域も豊かになる。子どもの学習を阻害するものは、家庭環境による影響を受けること、親が一方的に子どもの進路に期待して家庭教師をつけたりすることや、子ども本人に障害があり学力があがらないことなどが挙げられる。
澤委員	親が一方的に進路を決める。愛情は大事だが、過干渉はいけない。また、教育、そしてスポーツもアウトソーシングになっている。そこも子どもが自主的に意欲をもって行うことを妨げている、とも言える。子どもの個々の原因をつかんで対応してあげないといけないと思う。
A	台場の地域特性なのか、ひとり親の児童・生徒が意外と多い。また、マンションが多いので3世代住むということがほぼない。賃貸が多いので若い世代が多く、

	<p>40～50代がほとんどである。PTAをやっていたが、各家庭いろんな悩みをもっていて、PTA同士で子どもの相談をしたりしていた。コミュニティのひとつであり、子どもの共通のよろず相談をしていた。今、青少年委員もやっていて、キャンプなどに親にも手伝いに来てもらい、そこでコミュニティをつくり、様々な相談の出来る環境づくりを目指している。台場の立地の特性、不利なところを逆手にとれないかと考えている。</p>
澤委員	<p>赤坂地区では、子育てが孤立化しているという話があった。親の居場所を作るような方向性は、どの地区でも共通の課題なのかと思う。</p>
A	<p>居場所イコール愚痴の言える場所だと思う。楽しいイベントに集まり、ちょっとした雑談から次につながる形が良いと思う。</p>
B	<p>ただ、現実的には一番来てほしい人はこない。親は、過干渉とは思ってなくて、愛情だと思っている。東京は、きちんとしたものを与えれば子どもが立派になるのでは、という気持ちになる情報がたくさんある。後は、子どもを1人で留守番させられないから塾に通わせる、ということもある。幼稚園受験、小学校受験、ともにお金がかかる。そのために母親も働かないといけなくなり家にいない。そのためにお金と愛情の貧困になる。港区はいろんな人や企業が集まっている。橋渡しする人がいればとても良いもの出来ると思う。</p>
青木教育長	<p>子どもをレールに乗せることで、子どものストレスがたまる。そうすると精神的に貧困になると言える。昔も経済的理由から父母が働かざるを得なかったが、そのような時も地域が子どもを見守っていた。地域の大人を巻き込むというのは、昔から行われていたことである。4地区で地区教育会議があったが、根底には共通するものがあったように思う。</p>
澤委員	<p>麻布あたりだと外国人が多い、港南地区だと皆マンション住まいとか地域性はあるが、根本の課題は同じである。</p>
C	<p>相談環境の充実は、調査報告書をみて必要だと感じる。高輪地域ではCCCの人たちが地域の役に立ちたいと考えていた。学校以外のところで社会を応援できる場所があればよいと思う。子どもを見守る大人がいること大切である。</p>
澤委員	<p>けれど、大人が過干渉になってはいけない。子ども同士で遊びやけんかの中から経験し学んでいってほしいという気持ちはある。子どもの興味を引き出すのは、学校もそうだが地域の人材を活用して総合的な教育力を高めたい。学校支援地域本部もあるし。</p>
A	<p>学校事例集の中で、学習支援を必要としている人が多いとあるが、港区はすでに学習支援を行っている。このような意見があるということは、保護者と行政の視点がずれているのかもしれない。勉強の仕方がわからない子が増えているのかもしれないので、勉強の仕方が教えてもらえると良い。港区には、そういう人材がたくさんいると思う。方法論を教えることで、人は自立していく。考えることは楽しいんだ、ということ教えるサポートプログラムを作りたい。</p>
C	<p>知人で港区に赴任した英語の教員がいる。英語のレベルの低さに驚き、学校で英検を受けさせることにしたと聞いた。子どもが意欲をもって何かをするというのが大切なのではないか。</p>
B	<p>ちょっとしたコツで嫌いな勉強も出来るようになる。</p>
D	<p>漢検は、とても良かった。小学校から英検もさせてもらえたら嬉しい。中学に行くと英語でつまづくなら早い段階からやってほしい。</p>
渡辺校長	<p>港区は、中学校で漢検、英検、数検の補助を行っている。また、小学校では毎日1回英語を行っている。</p>
D	<p>報告書を見たが、2極化の傾向が見てとれた。高学歴・高所得と低学歴・低所得。地域の人材が活かしていない。例えば、ある児童館で良い取り組みを行っていたら、全児童館に広げるとか、大学の力、シニアの力をもっと活用したらどうか。大学、プラリバ、シニア、あいぷら、児童館、この連携がもっとできたらよい。学校と児童館以外の居場所をつくれば良いと思う。また、居場所の確保として、</p>

	<p>企業の会議室や人材を使って、将来への働き方の接点にもなるという観点から考えてみてはどうか。後は、子ども食堂だが、学校の近くに18か所くらい作ってみたら安心ではないか。</p>
B	子ども食堂のように与えるということも大事だが、貧困家庭にお金の価値観を教えることも大切だと思う。親と子の価値観を変えることも必要。また、子どもの得意なところを伸ばしてあげることも必要だと思う。
薩田委員	親と子の価値観をいい方向に進めていかないといけない。与えるだけではどうなのか。
澤委員	子どもは習い事で毎日忙しく時間に余裕がない。それも子どもが必ずしも望んでいることとは限らない。
青木教育長	Dさんが話しているセーフティネットも大切で、それがあってこそBさんの言う価値観を変えることにつながる。
D	収入が低くても習い事を多くさせると、親はどこかの支出を削ることになる。お金がない、プレッシャーがかかる等悪循環になる。子どもへの虐待も増える。親のケアも必要であるし、お金の有無関係なく心のケアは必要。何かあったときに地域のひとりひとりとつながることが必要だと思う。助けが必要なときに地域の人を頼れる環境づくり。
C	芝浦公園は、芝生広場とスポンジの山があり、子どもはとても好きで喜んでイキイキと自由に遊んでいる。地域の人意見で作ったと聞いた。とても良いと思う。
Bグループ	
船木校長	港区の福祉的、経済的な支援は大変優れているので、子育て世代が集まるのだと思う。ただし、芝浦港南地域は、経済面と学力面で2極化の傾向があり、学校でも差が出ている。家庭での学習も成立していないこともある。学力面は学校でなんとかしていかないといけない。
山形園長	芝浦に来て、マンション居住者が多くて驚いた。子供の遊び場が少なく保護者同士のコミュニケーションの場や機会も少ないと思う。また、未就園児の会があり、友達作りや相談場所を求めて来る親子が多い。園庭開放を活用して遊ばせる中で親子一緒に時間が保たれる。
船木校長	この地域の特徴として、一軒家がないことが挙げられる。マンション内でコミュニティがしっかりしたところとそうでないところがある。
A	上手くいっているケースは、マンションのキッズルームなどを利用してコミュニティを作っている。マンションの規模が大きすぎるため把握しきれない。子育ての孤立化はあり、プラリバから出張で来てもらって学校へのお願いは良くさせてもらっている。組織からのアウトリーチ、コミュニティから働きかける必要がある。
B	引っ越してきて、地域のつながりや地域の活動をどのようにしたらよいか、何をやっているのか、という情報を得ることが出来なかった。きっかけがあれば情報は入ってくるが、最初のハードルを乗り越えるのが難しい。
小島委員	学校だけでは子どもは育てられないので、地域と学校の双方で連携を求めている。
B	お祭りも盛んだが、その財源は町会費である。子どもがたくさん参加してくれる。お祭りなどは、地域とマンションでなるべく一緒に行うようにしている。
C	区民レベルでお手伝いする活動をしている。子育てのサポートには様々なバリエーションがある。幼稚園のお迎えサービスもそのひとつ。いろいろな意見を吸い上げてもらえる場をセッティングしていただくとサポートしやすいと思う。
田谷委員	マンションの場合だと町会費の集金が難しいが、お祭りにはマンションから子どもがたくさん参加している。お祭り活動が上手くいっているというが、その辺はどのようなになっているのか。
B	芝浦の新しいマンションは、オートロックでアポイントが取りづらい。大きなマ

田谷委員 C	マンションと町会と一緒に地域活動を行うよう努力している。 町会活動が活発になれば、愛情的な貧困の解消が出来るのではないかと。 親や子に言えないこともその上の世代として接すると、子どもの言葉が聞けるが、内容が深刻で子どもに影響を与えている。そういうことを救い上げてくれる場所があると良い。
小島委員 C A	学校では、スクールソーシャルワーカーが活動している。 学校には悩みを抱えている方は行かない。 今の地域コミュニティの状況から昔の地域コミュニティへは戻れない。小さい組織を束ねるプラットフォーム作りが必要である。ソーシャルワーカーやスクールソーシャルワーカーとは全く違うもの。1つのマンションに2,000世帯くらいいるというのは初めてではないか。昔の地域コミュニティとは切り替えて考える必要がある。
小島委員 B	スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーなどでは解決できない、学校では限界がある。学校支援地域本部では、地域の皆さんの支援を求めている。行政だけでは出来ないの、地域の皆さんの支援、教育委員会のバックアップを行いながら、いろいろな問題を解決していきたい。 子どもの日常をどうしていくか。今の現実の中で考えるしかない。あいふら、プラリバなど今ある物を活かして何が出来るのか、子どもの居場所を作る必要がある。
小島委員	子どもの年齢に合わせた居場所を各地区で考えながら行っている。地域ごとで一番良い方法を考え、作っていくのが良いのではないかと。
田谷委員	放課GO→は、それなりに機能していると思う。
小島委員	幼稚園でも、預かり保育など様々な選択肢が増えている。
田谷委員	中高生プラザも機能していて複合的な人が集まるので交流も出来つつある。上手く学校と連携できると良い。
小島委員 C	幼稚園の場合は、時間が短い。幼稚園と保育園では悩みも違う。交流もしづらい。貧困の状況はなかなか見えにくい面もある。どうしたら良いか。
小島委員 C	私自身相談できる人が多いので、いつでも相談して、といろいろな方に声掛けをしている。
小島委員 B A	下町だと声掛けの交流があるが、港区ではそういうことは難しいのではないかと。 経済的な貧困に関しては、解決が難しい。 いじめ問題協議会があるが、貧困と暴力が関わっている。学校にお手伝いとしていったが、実際に事例を見ると学校の仕事ではないかと思う。子ども版の包括支援センターができるか。
益口次長	平成29年度より、子育て相談や様々な相談に来る方は対応できるが、自ら相談に来ない家庭で、課題のあると思われる子を発見し、必要な支援を専門家等により検討してもらうための予算をつけた。幼稚園や学校で見つけてもらい、支援につなげていくものである。
小島委員 B	人権擁護委員を2期務め、自分の電話番号を教えたりもしていたことがある。子ども110番制度を作ったが、いろんなチャンネルを設けて行きやすい所に行けば良いと思う。行政からの周知方法も工夫してほしいという意見もあった。 子どもが必要としているときにタイムリーに情報が得られることも必要である。タイミングよく、子どもの目に触れるように根気強く広めることが大切である。
船木校長	いじめや不登校対策は、学校の需要を超えている。保護者の情報が最小限しかない中で子どものSOSを発見していく状況である。何かあった場合、子ども家庭支援センターに相談し情報を集めることもある。学校だけでは抱えきれない課題である。

Ⅲ 地区教育会議を終えて

今年度の地区教育会議も、出席いただいた皆さんから現在の立場はもちろん、これまでの経験を土台に多くのご意見を頂戴しました。同じテーマであるにもかかわらず、各地区での議論の内容が違っていたのが興味深い点です。各地区の成り立ちや特性を通じ、様々な意見を出していただきました。

一方で、どの地区でも共通な課題として挙げられていたのは、子どもを取り巻く環境が急速に変わる中で、家庭における親と子どもの関わりや地域での子どもの見守りが重要であるということでした。家庭での子どもとの関わりを大事にし、地域の大人たちが子どもを常に見守っていくことが、子どもの健全育成につながるということです。また、短期的な取組に加えて、長いスパンで子どもへの支援に取り組むとともに、親への支援も必要であることも明確になりました。

お忙しい中、ご出席いただいた皆さんに感謝申し上げるとともに、頂戴したご意見を踏まえ、今後の子どもの未来応援施策に生かしていきたいと考えております。

教育長 青木 康平

近年日本では貧困家庭が増加し、そのため十分な教育を受けられない子どもが増え、将来的に負の連鎖が心配される状況となってきている。この問題は活力ある民主社会の形成には大変重要であるところ、地区教育会議では港区に子どもの貧困問題はあるのだろうかという率直なご意見もいくつかありました。確かに港区では日常子どもの貧困はなかなか見えにくのですが、ご出席の校長先生方からこの点の事例を詳しくご紹介いただきました。

私としては、関係者全員が港区の子どもの貧困の現状を更に深く理解することが先ず大事であると感じました。その上で港区の場合は経税的には貧困ではないが、保護者が忙しすぎたり、愛情不足など、精神的意味での貧困の事例が多く指摘されました。いずれにしても今日では家庭だけでは解決できない問題が多くなり、学校・地域と十分連携する重要性は増すばかりです。会議では、子ども食堂（1食300円で食事を提供）、子どもカレッジ（ボランティアで数学など教える）など、有益な実践活動の紹介がありました。

また、テーマに限らず子どもの教育全般にわたって沢山の貴重なご意見をいただきました。今後の教育行政にいかしていきたいと思っております。

教育長職務代理者 小島 洋祐

今年度のテーマは「学校・家庭・地域の連携による子どもの未来応援」でした。私は初めて地区教育会議に参加させていただきましたが、5地区とも、お忙しい中ご参加いただいた皆様からのお話を伺い、子どもは学校・保護者だけでなく、地域の様々な方々から見守られ育てていただいていることを改めて実感し、感謝いたしました。

今回のグループディスカッションで「子ども食堂」の詳しい活動内容を知りました。特に遠くからやって来る子の話が印象的でした。安全は勿論ですが精神的にも安心できる居場所を求めていることがわかりました。他にも大変勉強になるお話を沢山うかがいました。ありがとうございました。

教育委員 薩田 知子

今回は、「子どもの未来応援」のテーマで地区教育会議が開催された。五地区を終えての第一の感想は、子どもを取り囲む環境の課題は、単に経済的なことだけでなく多様であるということだ。一つの切り口として、大都会で「自然が貧困」という意見もあった。

中でも印象に残ったのは、子どもに対する過干渉があった。現代は情報過多で、保護者は多忙で、子育てに関して孤立化している結果ということだ。また、逆に、保護者が多忙過ぎて、精神的に孤独な子供も多いようだ。

そういう中で、子どもは友達との遊びの中からいろいろと学ぶので、自由に遊べる場を作ることも大切という意見があった。

今後、施策を展開するにあたっては、子どもが抱える課題を、いかに的確に把握し、適切な対応をすることが重要と考える。

教育委員 澤 孝一郎

5地区の教育会議を終えて、子どもの未来応援と言うテーマで、各地区からいろいろなご意見をいただきました。特に貧困については、経済的な貧困もさることながら、愛情・遊び場・自然等の貧困と言う、都心区独自の貧困の事例が出てきました。また、各地区によっても貧困の内容は異なり、六本木・赤坂・新橋と言った繁華街と、芝浦・港南と言ったタワーマンションにより人口急増地区、白金・白金台と言った古くからの住宅街でも、地区独特の特徴がありました。今後は、それぞれの地区に合った問題の解決をしてゆかなくてはと思いました。

ご協力いただいた、ご出席者の皆さんには、貴重なご意見をいただき心より感謝いたします。

教育委員 田谷 克裕

